

明治後期の京阪神地域保育会における 海外の幼稚園動向の把握状況に関する考察

— 『京阪神聯合保育會雑誌』を手がかりとして —

金子嘉秀

(2011年10月6日受理)

A Study on the Common Knowledge of Foreign Kindergartens among Kindergarten Teachers in the Keihanshin Region in the Latter Part of the Meiji Era
— By focusing on the knowledge transmitted by the Kindergarten Union Magazines —

Yoshihide Kaneko

Abstract: In the latter part of the Meiji era, Keihanshin (includes Kyoto, Osaka, and Kobe) had the largest population of kindergartener and thus the teachers of the kindergartens at the region were very interested in how they treat the kindergarteners. One year after establishing Keihanshin Kindergarten Union, the Union decided to publish its own magazine for the sake of researching practical method and knowledge of the kindergarten, and distributed the first magazine in July 1898. Since the magazines includes a lot of discussions and opinions of kindergarten teachers, those contents were examined and re-examined from the viewpoints of educational system, qualification of teachers, educational methodology, gender issues, and issues in the connection between the kindergarten and the elementary school. Though investigating the knowledge about foreign kindergartens are vital to consider how the teachers in the region shifted their conservative method to new education method in the Taisho era, however, it was never considered thoroughly. After detecting articles in the magazines which mention foreign kindergartens, following characteristics of the information conveyed by the magazines, and how the teachers treated the foreign information are found. Firstly, they thought highly of American way of managing kindergarten than the other countries systems. Secondly they could know the other way of treating infants (e.g. the mother school in France) but didn't adopt because of social and economic restrictions.

Key words: history of ECEC, Japanese kindergartens.

キーワード：京阪神聯合保育會，幼稚園史

1. はじめに

京阪神地域は、明治8年に京都に幼稚遊嬉場が開設されて以来、明治12年には大阪府立模範幼稚園が開園されるなど、近代的な幼児保育施設を早くから導入した地域であった。明治22年になると、大阪府が在園児

数において東京府をしのぐようになるなど¹⁾、幼稚園教育が隆盛していった。このような地域にあって、京都市保育會（明治22年設立）、大阪市保育會（明治30年設立）、神戸市保育會（明治30年設立）など各地に幼稚園保育研究を目的とした各団体が次々と設立されたが、それらの保育會が問題・議題を持ち寄り、合議

を行うための組織として明治30年11月に京阪神聯合保育會（以下聯合保育會）第一回大会が開催された。またこの聯合保育會は、明治31年から会誌として『京阪神聯合保育會雜誌』が原則年2回出版され、会員に頒布されるようになった。

この聯合保育會およびその発刊誌は、村山貞雄（1959）によって所収の記事が保育内容の検討に用いられるなど、多くの研究者によって多角的に検討が加えられてきた。その内容を分析した先行研究としては、金子真知子（1993）田中まさ子（1998）、田中友恵（2002）、柿岡玲子（2005）、秋山麻美（2007）、森岡伸枝（2009）らのものが挙げられる。金子真知子は教育制度変容を辿り、田中まさ子は表現方法という保育内容論の手がかりとして用いた。また田中友恵は保育の資格・待遇に関する当保育会の建議内容を精査し、柿岡玲子は東基吉の保育者論・保育思想との関係性の検討、秋山麻美は本雑誌に含まれるジェンダーの内容の分析、森岡伸枝が幼少連携に関する言説分析、という各視点から検討を加えた。

幼児教育の泰斗の一人である水野浩志（1980a）は当該雑誌をフレーベル会の『婦人と子ども』と雑誌の全体的特徴を比較し、後者が「東京女子師範学校附属幼稚園関係者を中心とした、幼稚園教育の啓蒙的性格の強いもの」であるのに対し、本誌は三市聯合保育会の大会報告を中心としつつ、有意義な論説・研究課題・記事・課題を持ち寄り編集されており、また現場の保育問題や悩み、あるいは研究の経過、所属幼稚園の実態調査や試験的取り組みなど「各時代の現場保育の実情を知るにはまことに好都合」と対比的な評価を与えた。森岡（2008）も本雑誌の特徴を、「全国の幼稚園に関する動向も掲載されて」と指摘している。さらに本論では、もう一つの特徴である、「海外の幼稚園の現状・動向に関する情報」の盛り込まれた記事が適宜掲載されている点にも着目していきたい。

明治期の日本の幼児保育界における海外の幼稚園情報の摂取状況を検討したのものとしては、岡田（1963）の研究があり、これは幼稚園創設期から明治14年にかけての幼稚園関連書籍の輸入状況を国会図書館の蔵書から検討し、アメリカ合衆国由来の文献が多いことを指摘したものである。しかし、明治15年以降日本において幼稚園が発展していく過程での海外の幼稚園事情に関する摂取の状況・内容を検討した研究は、その後十分に行われてこなかった。

しかし、大正期以降の幼児保育界の動向、例えばモンテッソーリ法、新教育運動などの歴史・社会的位置取りを検討する際、その背景・淵源の一つとして、明治時代の幼児保育界の問題意識の形成過程も明らかに

し、これを考慮に入れる必要があるのではなかろうか。

柿岡（2005）は当雑誌の読者層について、「読者の殆どが現場の保姆」であったと評価し、森岡（2008）もこれに賛同した。本論ではこの特徴に加えて、「京都市・大阪市・神戸市の公立園現職保姆の殆どが読者」であった点にも着目し、論を進める。なぜならば、本雑誌は普通会员たる現職保姆らにも頒布された非売品の雑誌であるが、明治31年7月時点での会員名簿²⁾より計算した一園当たり平均保姆数（大阪市3.10人、京都市3.57人）と、同時期のデータは存在せず、約4年後の第十號に添付された明治35年7月時点での大阪市立園の平均保姆数（3.13人）³⁾ および、明治36年3月時点での京都市立園の平均保姆数（3.72人）⁴⁾ と比較すれば、園数の変化や若干の会員の入退会は考えられるものの、当地域の公立園保姆の圧倒的多数が会員となっていたことが推定でき、彼女たちは日常的に当雑誌に目を通すことが容易な環境にいたと考えられるからである。

ゆえに当該雑誌の掲載内容は、本論で検討する海外幼稚園の現況をはじめとした「当時最新の幼稚園情報」に関する、京阪神地域の一般的な公立園保姆の「最大公約数的な知識、あるいはコンセンサスとしての知識」の代理指標として捉えることが可能であろう。また、その内容的傾性は大阪初の保姆の一人であり第八號から第二十號までの編集長を務めた氏原銀や、保育会幹事の約半数を占めていた保姆ら⁵⁾、京阪神における幼児保育界を牽引していた有力者の興味関心・価値判断を反映しているものとみなすことができよう。

本論では、海外の幼稚園の動向に関する知識を含む記事を抽出の上、その内容を検討することを通じ、明治後期の京阪神地域の一般的な現職保姆が、どのような海外の幼稚園情報に触れ、それらに対してどのような解釈を行い、また自己の実践や研究に活かしていたか、を検討するものである。

2. 対象期間と方法について

本論は『京阪神聯合保育會雜誌』（含京阪聯合保育雜誌）のうち明治年間（1968-1912）発刊分、即ち第一號（明治31年7月発刊）から第式拾九號（明治45年7月発刊）までを対象とする。そして、全記事内より、「外国における幼稚園あるいは幼児保育制度に関する言及がある記事」を抽出する。そして該当記事内の言説について、1）どのような話者により語られた言説が採用されているか、また2）それらの海外知識全体にはどのような傾向があったか、の二点を主たる観点として、その内容分析を行う。なお、話者・編集者に

よる情報伝達内容の科学的・歴史的な妥当性については、その正否を問わない。なぜなら本論は、話者・編集者が「何を事実と信じ、価値ある情報として伝達していたか」を分析し、もって彼らによって生きられた時代的空間における海外の幼稚園認識を探ることを目的とするためである。

3. 雑誌記事内容の検討

3-1. 東京女子師範学校関係者の与えた影響

水野（1980a, 1980b）をはじめ多くの先行研究が指摘するように、当時唯一の官立幼稚園であった東京女子師範学校及び同附属幼稚園の動向は、地方に対して一定の権威性と影響力を有していた。京阪神地域においても「一定の注意」が向けられていることが、中村五六、東基吉、倉橋惣三ら東京女子師範学校附属幼稚園関係者を保育會大会に招聘し、またその演説内容が雑誌にも掲載されていることから、首肯できる。第一號では、東京女子師範学校教授であった中村五六の三市聯合保育会での演説筆記を掲載しているが、中村はアメリカに於いても幼稚園関係者が保育会を立ち上げ、研究を行っている事を紹介している⁶⁾。このような東京女子師範学校関係者による情報提供は、その後も東基吉の講演筆記⁷⁾などがあった。さらに明治期の最終號である第二十九號において倉橋惣三が初登場し、誌面上初となるモンテッソーリ法を紹介している点⁸⁾は、来るべき大正時代の新しい幼稚園観の予兆を感じさせるものであった。

ところで本雑誌は、東京女子師範学校附属幼稚園の保姆らにより結成された研究会であるフレーベル會の雑誌『婦人と子供』の関心動向についても注意を向け、明治40年4月に『婦人と子供』内で掲載されたアメリカの幼稚園の現状に関する甲賀藤子の報告が僅か三ヶ月後の7月に発刊された十九號に転載されるなど、当時の時間距離的状况を鑑みると、非常に迅速な情報の抽出・掲載決定がなされている。そして、転載元が海外の幼稚園情報を中心とした雑誌ではないにかかわらず、「濠州ニューカッスルの幼稚園⁹⁾」、「幼児期の衛生と理想の幼稚園¹⁰⁾」、「独逸ニ於ケル幼稚園教育ノ状況¹¹⁾」など転載された記事には海外に関するものが多いことから¹²⁾、フレーベル會雑誌から得られる情報として特に海外に関する知識を重視し、これの取得に旺盛であり、選択的に掲載していたと考えられる。

3-2. 「最も立派」で「發達して居る」米国の幼稚園

米国は、「世界中最も立派な幼稚園のあるのは亞米

利加である¹³⁾」と紹介されたり、また文部省視学官の生駒萬治によってドイツ・イギリス・フランスなどと比較して「フレーベルのシステムに依つてやつて居る最も盛なのはアメリカ」であり「その数に於ても最も多いし實際のやり振りに就ても最も發達して居る」と評価されるなど¹⁴⁾、幼稚園教育の最も發達した国として幾度となく紹介されている。このように多様な背景を持つ話者らが繰り返すことによって強化された「優れた国としての米国の幼稚園実践」に関する知識は、明治年間を通じ豊富に誌面上に盛り込まれており、これらをまとめると表一（次ページ）のようになる。

これらの米国に関する記事はその内容により、1) 幼稚園制度・統計に関する情報、2) 幼稚園関係の大会に関する情報、3) 幼稚園論に関する情報、4) 幼稚園実践に関する情報、に大別することができる。

まず、幼稚園保姆の養成に関しては、2～3年と長期であり、さらにその約半分が実地教育であるという特徴が述べられるとともに、その養成において用いられる教科書類の紹介がなされていた。

また、幼稚園の保姆対園児の比率が1：22と保姆が日本の平均に比して潤沢であり、また園数や園児数からみて数値的にも米国において幼稚園が隆盛している事を見てとれるものとなっていた。

このような優れた国としての米国の状況は、三市の公立保姆らの現におかれている状況と比較されることで、問題意識を生じせしめ、なぜ保姆の養成が充分に行えないか、また保姆の適切な養成方法はどのようなものか、という発問をめぐって議論¹⁵⁾が行われるに至った一因となったのではなからうか。

ところで、A・L・ハウは三市聯合保育會結成以前から京都市保育會、大阪市保育界に請われて講習会や講演会を行うなど明治後期の京阪神地域で指導的立場にあった人物であり、明治期の京阪神幼稚園史を語る上で避けることはできない。水野（1980b）によれば、ハウは萬国幼稚園聯合大会の報告記事（第三號）、スーザンブローの公演要旨（第四號）、欧米各国の幼稚園發達事情と種類（第四號及び第六號）米国における幼稚園論争（第七號）などを直接投稿し、啓蒙活動に努めてきたが、第八號以降は自ら寄稿することはなかったとされる。表一にあげた、米国における幼児保育に関係する大会の情報は専らハウの紹介もしくは、ハウの送付した小冊子に基づくものであり、この点は頌栄幼稚園に於いて行った幼稚園実践・保姆養成や、各地での講演会と並び、ハウの日本の幼稚園制度への貢献として評価されるべきであろう。

その後、1903年10月3日から1906年3月21日までハウは帰米することになる¹⁶⁾が、ハウから氏原銀宛に

表一（米国の幼稚園に関する掲載情報一覧）

幼稚園制度・統計などについて
<ul style="list-style-type: none"> ・米国の保姆は3年間の養成期間を経て養成され、1年目は実地教育で、2,3年目が研究に充てられる（第四号「神戸保姆會」） ・参観したどの養成機関でもその半分は実地教育がなされて居る（第四号「米國に於ける幼稚園の發達」） ・日本が37人につき保姆1人であるのに対して米國では22人に保姆1人である（第六号「幼稚園に對する希望」） ・幼稚園数についてフィラデルフィア（201校）など多い都市を紹介（第六号「西洋に於ける幼稚園の種類」） ・幼稚園の盛んな地域、及び幼稚園数、保姆数、園児数の紹介（第十号「日本の小學教師第五卷第五拾参號中の下田文學士歐米小學校談（抜萃）」） ・幼稚園数、園児数の紹介（第二十五号「歐米の幼稚園」）
大会について
<ul style="list-style-type: none"> ・萬國幼稚園聯合大會第六回大会のプログラムと主な講演要旨の掲載（第三号「萬國幼稚園聯合大會の景況」） ・オハイオ州コロンプスで開催された内國母親會議のプログラム紹介（第六号「内國母親會議」） ・シカゴで行われた「萬國幼稚園會」が開催されたことの紹介（第六号「万国幼稚園會」） ・國民教育協會の幼稚園教育部と兒童研究部の聯合會のプログラムを紹介（第七号「國民教育協會の幼稚園教育部と兒童研究部の聯合會」） ・「内國教育大會」と称する冊子の各部会と保育部と兒童研究部に關係する部分を約したものを掲載（第十三号「米國教育大會」）
幼稚園論について
<ul style="list-style-type: none"> ・恩物の取捨選択問題について紹介（第五号「京阪神聯合保育會記事 研究問題（恩物の使用法につきて）」） ・幼稚園運動が少なくとも四つの運動、すなわち開山運動、人道運動、國民運動、母親運動があったことを指摘（第六号「西洋に於ける幼稚園の種類」） ・ブロー嬢の幼稚園論の紹介（第六号タイトルなし） ・フレーベルの教育論に関するフキッシャーの主張とこれにたいするエバイの反駁の紹介（第七号「フキッシャー嬢とエバイ教授との論争」） ・スタンレーホール教育論の紹介（第二十九号「幼児保育の新目標」）
幼稚園実践について
<ul style="list-style-type: none"> ・書間養育所（Day Nursery）という労働者階層のための託児施設の紹介（第一号「幼稚園の教師に就て」） ・ニューヨーク市の幼稚園における、沙盤・沙圃の冬場の遊びにおける使用を紹介しつつ、沙壇利用を提案（第六号「沙壇」） ・アメリカのデイリープログラムや室内裝飾の紹介（第十号「日本の小學教師第五卷第五拾参號中の下田文學士の歐米小學校談（抜萃）」） ・ハワイの幼稚園状況の紹介（第十七号「布哇の幼稚園事業」） ・旧式幼稚園と新式幼稚園の紹介（第十九号「米國東方の幼稚園」）

送られた小冊子の翻訳記事の以外は、いかなる掲載状況であったであろうか。まず、直接的に海外の情報を取り上げる事を目的とした記事は、加藤榮蔵による「布哇の幼稚園事業¹⁷⁾」、生江孝之の「英米諸國に於ける感化事業¹⁸⁾」、そして前出の甲賀藤子の「米國東方の幼稚園¹⁹⁾」があった。また他方で他の情報源の獲得に意欲的であったとみられ、大阪明星学校長であったウラルフ氏（第十四号）、大阪住友家庭教師であるリチャードソン嬢（第十五号、第十六号）などハウ以外の在京阪神の外国人による寄稿も多く採用されるようになった。

このように、ハウという米国出身でブローら幼稚園運動の中心人物に知己を持ち、また I. K. U. 会員であるという、米国の最新幼稚園事情に近い位置にいた人物の帰国により、重要な情報源を失った聯合保育会は、1) 海外の幼稚園事情に明るい日本人寄稿者の確保、2) 他の雑誌に掲載された海外幼稚園情報の探索と転載²⁰⁾、3) 京阪神在住の外国人寄稿者の開拓、を通して、その後も止むことなく海外の幼稚園情報の摂取に努めていたのであった。

「恩物の取捨選択」は、海外における議論が第五号でもたらされる²¹⁾ 以前、三市聯合保育會の第一回の談話会の第一問題として取り上げられているテーマであった。このように日本国内における議論が先行し、これに比較対象を与える形で海外の情報が誌面に登場する議題としては、子どもの「手技の好悪」があった。この議題については、フレーベル會の『幼児發育研究組合報告』内の「恩物の内幼児の最困難に感ずるものはなにか」という質問項目が最も早く、転載される形で掲載された²²⁾。その後第六号で、米國での6歳-17歳を対象とした、遊戯の好きな順番とその理由を調査した結果が、「幼稚園時代以上の生徒に就て調べたもの故、直接に諸君の御爲にはなりませんまいが」と前置きしつつ、紹介された²³⁾。これ以降、三市保育會においては幼稚園児を対象とした手技の「好悪」調査が散発的に行われるが、いずれの場合も前者のように「難易」ではなく後者と同様の「好悪」をクライテリアとして選択しており、より子どもの目線に近く主観的な「好悪」という判断基準は、上述の米國の実験内容の意識を行った際から、三市保育會では一貫して重視されていたといえよう。

さらに明治40年になると、いわゆる新旧の幼稚園実践形態のうち、新式の幼稚園がシカゴに於いて最も盛んであることが、米國在住の甲賀ふじ（甲賀藤子）²⁴⁾ および、貴族院議員の井沢修二²⁵⁾ という、別のソースからほぼ同時期に紹介されることとなった。特に甲賀ふじ（甲賀藤子）は、同記事内で保育内容の特徴に

ついても、以下のように紹介している。

恩物の取り扱ひ方が所謂新式と申す方は頗る自由に富んで居て毎週の豫案なども子供の様子や何かで自由に變更して行ふと云ふ風で且天氣のよい日には室内の恩物よりも外の遊びをさせると云ふ風なのであります。舊式の方ですと豫案は豫案で変更する様な事はめつたには御座いません位であります。積木なども舊式の頑固なものに比べて新式では机上で小さなのを使はずなどはしないで大きな煉瓦くらいものを使つて門を造り家を構らへて出来上れば其中を通り抜けたり、もぐつたりして遊びますし庭園内の花でも石でもととし使つて遊ばせ談話なども時に應じてすると云ふ風で頗る自由になつて居ります。(60頁より)

これは従来のフレーベル主義系の幼稚園思想・保育内容と比べた、新教育運動系の保育観の相対的な特徴を簡潔にはあるが、よく捉えた内容であると言えよう。

このように保育會雜誌は、これを総体としてみると、米国の幼稚園に関する多角的で豊富な情報を、時宜に適う迅速さでもって、会員に提供し得ていたのであった。

3-3. その他の国々における幼児保育制度に関する言説

ドイツの幼稚園についてはフレーベル式幼稚園の淵源がドイツにあることもあって、米国に次いで言及の多かった国である。独逸には四種類の幼稚園があることや²⁶⁾、その中でも国民幼稚園が主流であり、これは主に下層階級の子弟を対象としており、その特色は家族主義・勤労主義・体育主義というべきもので、少人数制、労働に対する興味、精神的陶冶よりも身体上の擁護を重視していること²⁷⁾、またペスタロッチフレーベル會が幼稚園と小学校の連携に就いて研究していること²⁸⁾が紹介されている。

またフランスには母親学校があり²⁹⁾、それは幼稚園とは思想が異なり「乳母と幼稚園の職とを混ぜ合せた様な³⁰⁾」制度であること、英国では幼稚園ではなく幼児学校が主流であること³¹⁾も早くから紹介されており、これらの国々の保育制度の歴史的背景として、また近代保育制度の淵源として、フレーベルの主張した幼稚園と並んで、フランスでオーベルリンが設立した幼児保護所(但し記事内では「接合せ學校」と表現)、スコットランドでオーウェンが設立した性格形成新學院(但し記事内では「幼児預所」と表現)についても、見逃すことができないとの指摘があった³²⁾。またこれ

ら英米独仏に加えてベルギー(白耳義)、オランダ(和蘭)、スイス(瑞西)、ハンガリー(匈牙利)、イタリア(伊太利)の幼稚園数と園児数に就いても紹介があった³³⁾。

以上で考察したように、当該雑誌はドイツ・フランス・英国の幼児教育制度についても、その発端や現在の制度、その保育方法や園数・在籍幼児数など、簡素ではあるが、基礎的な特徴を捉えた情報は知り得る内容となっていた。これはくしくも政府が明治時代に文部省留学生を派遣した主要国すなわち独・英・米・仏と一致する³⁴⁾。これは、本雑誌でも複数の文部省留学生³⁵⁾が登場し、海外の情報を伝達しているように当時第一級の情報源として珍重され³⁶⁾、一地方の現場に伝わってくる情報についても、これら文部省が政策的に重視した国々の情報に直接的・間接的を問わず片寄ってしまう傾向があったのであろう。そして他方で、デンマーク、オーストラリア、等、文部省留学生をわずかししか派遣しなかった国、あるいは派遣のなかった国の記事は一件程度にとどまり、また先述した第二十五號「歐米の幼稚園」において、他の国は1855年から1868年の統計が用いられた中であって、ハンガリー(匈牙利)の統計は1828年と四半世紀以上前のものが用いられるなど、情報量の少なさ、情報の古さという結果に繋がったのではなかろうか。

いずれにせよ、文部省から直接的な命令や指導を受ける関係になかった本雑誌も、当時の国家が主たる情報入手先として選定した国々と類似する比重でもって、これらの国々の情報を掲載していたのであった。

4. 総括的分析と今後の課題

前節で検討したように、当時の京阪神地域の公立園保母らは、海外の最新の幼稚園に関する情報について、保育會会員であれば当然に頒布される権利のあった『京阪神聯合保育會雜誌』を通して、複数の話者・情報源から知識を得ることが可能であった。明治年間の本雑誌を通して知り得る情報は、当時の米国においては「伝統主義と進歩主義」といった論争があり、明治後期になると新式幼稚園が隆盛してきたことや、欧米に幼稚園以外の幼児保育制度として母親学校などの福祉的機能を有するものがあることなど、多岐にわたるものであり、米国の幼稚園の時事情報に関してはとりわけ豊富かつタイムリーに掲載されていた。

三市の保母らは、決して海外の幼稚園動向について無知蒙昧である故に、フレーベルが考案したとされる恩物を多く利用していたわけではなかった。同雑誌第二十號内で井沢修二がA・L・ハウが「亞米利加のこ

とを其儘直ぐに今やつておる」ことを「例へば遊びの中にも羊の遊びなどがある、羊と云うものは日本の幼稚園の子供は殆んど見たことがない、殊に羊遊びをやる事柄は日本の最古い宗教歴史などに基いたらうと思ふやうなこともある」と指摘したように³⁷⁾、日本社会的な制約や、京阪神地域社会的な制約があった。そして、「元来幼稚園ハ『フレーベル』氏ノ創ムル所タルハ誰モ知レル所ナレドモ日本ニテ其ノ幼稚園ヲ建テ、幼児ヲ保育スル以上ハ日本ニ通ジテ完全ナル人物ヲ作ラザルベカラズ故ニ外國ノ所謂完全ト日本ノ完全トハ自ラ異ナラザル可カラズ」という明治36年の保育部大会における意見³⁸⁾にみられるように、日本固有の価値体系を準拠枠組みとした、より高次の幼稚園保育が模索されていた。

そして保姆ら三市の幼児保育関係者は、フレーベルのいわゆる二十恩物中の粘土細工を廃止し、代わってパラフィンを恩物にするか否かの議論がなされた際、パラフィンを費用の面から不採用とするという京都市保育会としての意見が出たように³⁹⁾、恩物などフレーベル主義を連想させる教材を、その思想的優位性よりもむしろ経済的利便性を評価する立場から利用している場合もあったのである。また、フレーベルの手技を連想させる「恩物」という用語自体も、タンポポやクローバーを形容して「自然恩物」というような造語として用いられた事例もあり⁴⁰⁾、この場合「幼稚園における教材となり得るもの一般」を指す言葉という意味以上の深い含意を持たずに使用されていた。彼(女)らは決してフレーベルの幼稚園原理を墨守するわけではなく、海外の事情も重要な参考対象としつつ、京阪神地域に即した保育を模索していたのであった。

この後、大正期に入り、倉橋惣三の「誘導保育論」に代表されるような自由保育論が現場で支持・受容されていくことになるが、その背景には保育会における恩物研究などの保育問題認識の高揚と並行して、海外における幼稚園の現状を知り、いわゆるフレーベル主義を墨守する「旧式」よりも子どもの自主性を尊重し、カリキュラムも柔軟な「新式」幼稚園こそが時代的趨勢であることを知り得ていたからであるといえるのではなからうか。

今回、『京阪神聯合保育會雜誌』を検討するに当たり、海外由来の翻訳記事であるが、原著の示されていないものが数点存在した。今後、より詳細な海外の幼稚園情報の接取状況の把握のために、1) これらの原著の特定を進めるとともに、2) 重要なパイプ役を果たしたA・L・ハウをはじめとした宣教団による海外情報伝達過程、3) キリスト教系をはじめとした私立幼稚園における実践と海外知識の関係性、などを検討して

いくことが望まれよう。

【註】

- 1) 文部省年報第17-19巻(明治22-24年)において、「特ニ旺盛ナルハ大阪府ニシテ東京府之ニ亞ク」(p.58)と評価されたように、大阪府の幼稚園在籍幼児数1,548名(小学校附設保育科にさらに2,250名)で東京府1,289名(東京女子師範学校附属幼稚園を加えれば1,478名)を超えるまでになった。
- 2) 『京阪神聯合保育會雜誌』第一號「會員氏名左の如し」47-55頁より算定。
- 3) 同第十號卷末「大阪府管内公私立幼稚園並大阪市保育會一覽表」、但し明治31年7月の時点の37園に比べ今橋・相生・岩井の名がなくなり、かわって集英・精華が加わった結果、36園となった。
- 4) 同第十號卷末「京都市立幼稚園一覽表」、但し明治31年7月の時点の市立19園のうち柳池・永松の名がなくなり、また京極幼稚園が新設されたため、園数は18となった。
- 5) 同第六號 69-70頁
- 6) 同第一號「三市聯合保育會に於ての演説」4-12頁
- 7) 同第八號「幼稚園學説及現今の保育法や幼稚園18-32頁、及び同第九號「幼稚園學説及現今の保育法(承前)」1-18頁
- 8) 同第二十九號「幼児保育の新目標」1-17頁
- 9) 同第十三號 67頁
- 10) 同第十四號 9-13頁、および第十五號 1-5頁
- 11) 同第二十一號 70-73頁
- 12) 『婦人と子供』よりの転載分九件中4件、ほかは関西の幼稚園参観記二件、幼稚園関係者の論文記事二件
- 13) 『京阪神聯合保育會雜誌』第十號「日本の小學教師第五卷第五拾參號中の下田文學士の歐米小學校談(拔萃)」46-48頁
- 14) 同第二十八號「生駒文部省視學官の演説」1-4頁
- 15) 同第二十二號「各地方に於て最も適當なる保姆養成の方法如何」37-39頁
- 16) 高野勝夫(1973)『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』76頁
- 17) 『京阪神聯合保育會雜誌』第十七號 50-52頁
- 18) 同第十八號 3-17頁
- 19) 『婦人と子ども』第七卷第四號より転載
- 20) 出典の明示された転載記事は57件あり、引用元としては『教育時論』(19件)、『大阪朝日新聞』等の新聞記事(9件)が多かった。海外に関する記事は『教育時論』の5件をはじめ、『日本之小學教師』(2

件), 『婦人と子ども』(4件), 『官報』(1件), 『教育公論』(1件), 『教材研究』(1件), および『ひかり』(1件)など複数の媒体から抽出の上, 掲載されている。

- 21) 『京阪神聯合保育會雜誌』第五號「京阪神聯合保育會記事 研究問題(恩物の使用法につきて)」17-18頁
- 22) 同第一號「幼児發育研究組合報告」81-87頁
- 23) 同第六號「兒童の好む遊戯」87-88頁
- 24) 同第十九號「米國東方の幼稚園」57-61頁, ただし原著は『婦人と子ども』第7巻第4號 11-15頁
- 25) 同第十九號「幼稚園の事業」15-18頁, ただし明治39年12月の講演筆記
- 26) 同第六號「西洋に於ける幼稚園の種類」84-86頁
- 27) 同第十九號「獨國に於ける幼稚園の状況」56-57頁, 及び同第二十一號「獨逸ニ於ケル幼稚園教育ノ状況」70-73頁
- 28) 同第二十八號「生駒文部省視學官の演説」1-4頁
- 29) 同第一號「第二回三市聯合保育會」43頁
- 30) 同第六號「西洋に於ける幼稚園の種類」84-86頁
- 31) 同第四號「米國に於ける幼稚園の發達」77-78頁, 同第十號「日本の小學教師第五卷第五拾參號中の下田文學士の歐米小學校談(拔萃)」46-48頁
- 32) 同第十九號 谷本富「幼稚園を如何にすべきか」1-15頁
- 33) 同第二十五號「歐米の幼稚園」72-73頁
- 34) 文部省の一方に派遣された留学生の多かった国順に並べた。詳しくは渡辺實(1977)『近代日本海外留学生史』上巻巻末の第二表を参照のこと。
- 35) 乙竹岩造(第十九號「獨國に於ける幼稚園の状況」56-57頁), 服部教一(第二十二號「獨逸教育の現制度」53-54頁), の記事が掲載されている。
- 36) 渡辺實(1977)『近代日本海外留学生史』下巻 1123頁
- 37) 『京阪神聯合保育會雜誌』第二十號「幼稚園の一新紀元」1-5頁
- 38) 同第十一號「保育部大會記事」43-44頁
- 39) 同第六號 61頁
- 40) 同第十八號「大阪府女子師範學校附屬幼稚園保育

状況」45-49頁

【引用文献】

- 秋山麻実(2007)「保育をめぐる「声」とジェンダー—『京阪神聯合保育會雜誌』をてがかりに—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第9巻 208-216頁
- 橋川喜美代(2003)『保育形態論の変遷』春風社
- 柿岡玲子(2005)『明治後期幼稚園保育の展開過程—東基吉の保育論を中心に—』風間書房
- 金子真知子(1993)「明治後期学制改革問題と幼稚園—京阪神連合保育会の動向を中心に—」『保育学研究』第31巻 78-87頁
- 京阪神聯合保育會『京阪神聯合保育會雜誌』(同復刻版全五冊(1983)臨川書店)
- 清原みさ子(1998)「日本のフレーベル受容における恩物と作業」『人間教育の探求』第11巻 125-131頁
- 水野浩志(1980a)「京阪神聯合保育會雜誌(1): 創刊当初の内容」『幼児の教育』第79巻第9号 58-63頁
- 水野浩志(1980b)「京阪神聯合保育會雜誌(2): 時代的な内容の変遷」『幼児の教育』第79巻第9号 14-21頁
- 村山貞雄(1959)「明治三十年代の保育内容について」『幼児の教育』第59巻第9号 59-61頁
- 森岡伸枝(2009)「幼少連携の課題—明治・大正期の京阪神聯合保育會から—」『聖母女学院短期大学研究紀要』第38巻 119-129頁
- 岡田正章(1963)「明治初期の幼稚園論についての研究(1)」『人文学報』第31号 69-90頁
- 高野勝夫(1973)『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』頌栄短期大学
- 田中まさ子(1998)『幼児教育方法史研究』風間書房
- 田中友恵(2002)「明治・大正期における京阪神聯合保育會による建議—保母養成機関設置および保母の資格待遇に関する改善要求を中心に—」『上智教育学研究』第16号 38-50頁
- 渡辺實(1977)『近代日本海外留学生史』上巻 講談社
- 渡辺實(1977)『近代日本海外留学生史』下巻 講談社
(主任指導教員 七木田 敦)